

Eloisa は幸福を手に入れるか

—*An Essay on Man* を基にして—

石川 郁二

I

“*Eloisa to Abelard*”における女主人公 Eloisa は愛に苦悩する女性である。Abelard との愛に燃える彼女の心は、作品が進むにつれ変化をみせ始める。この小論は *An Essay on Man* の中に記述されている “Self-love” “Reason” を基にして、変わり行く Eloisa の心を調べ、さらに作品の結末において、*An Essay on Man* でいう “Happiness” の状態に彼女がいるかどうかを論じたものである。

II

An Essay on Man に記述されている人間性の原理に関するものとして最もよくそれを言い表しているのは次の箇所である。

Two Principles in human nature reign ;
 Self-love, to urge, and Reason, to restrain ;
 Nor this a good, nor that a bad we call,
 Each works its end, to move or govern all :
 And to their proper operation still,
 Ascribe all Good ; to their improper, Ill.

Self-love, the spring of motion, acts the soul ;
 Reason's comparing balance rules the whole.
 Man, but for that, no action could attend,
 And, but for this, were active to no end...

(*EOM*, II 53-62)¹⁾

ここで人間性の原理として2つのものが説明されている。自愛と理性である。自愛は運動の源であり魂を動かし、理性の比較考量はすべてを統治するものであるという。そしてこの2つが人間のなかに存在し、人間を行動へと駆り立て、活発に目的へと向かわせるものなのである。

ここでいう自愛とは何であろうか。

Modes of Self-love the Passions we may call ;
 'Tis real good, or seeming, moves them all...

(*EOM*, II 93-4)

つまり自愛とは、感情ということであり、欲望・激情とも言えるものである²⁾。この欲望は自己中心的なものであるが、それを理性の管理の下に置き、他人にも分け与えるものであれば、それは美德ということにもなるのである³⁾。

この自愛は人間が生存する限り一生ついて回るものであり、年齢ごとに欲望がある。死ぬ時にもその欲望がなくなることはない⁴⁾。さらに自愛は「現在の意識」で目先の利益をみるのであり、現在に主眼点が置かれている。この点に関していえば、理性は現在に主眼点はなく、「未来と結果」をみるものである⁵⁾。

この理性と欲望とがそれぞれの比喩で表されている箇所がある。

On life's vast ocean diversely we sail,
 Reason the card, but Passion is the gale...

(*EOM*, II 107-8)

つまり理性は「海図」であり、欲望は「強風」である。航海に強風は危険なものだが、風がないと船は進まない。まさにこの理性の下に欲望をうまくコントロールしていくことが重要なのである。

さて、この理性と感情という面から Eloisa の描き方をみていきたい。この作品の場合、感情とは「愛の激情」ということである。“Eloisa to Abelard”という作品は悲恋の物語である。この作品の主題は序文にある通り「神の恩寵と人間の本性との葛藤、節操と愛の激情との葛藤」⁹⁾である。この葛藤を人間性の2つの原理、理性と感情というものを中心に考え、Eloisa について考察してみたい。

作品の59ページから、Eloisa が Abelard に初めて会った時の回想が描写されている。純真だった彼女が初めて彼の燃えるような情熱に出会い、敬慕の念が次第に愛の感情へと変わっていく。「愛することは罪ではない」と Abelard に教わり⁷⁾、彼女は急激に彼を愛するようになるのである。彼女は人間としての彼その人を愛するようになり、彼のために天を失っても悔いがないと思うようになる。相思相愛の幸せに酔いしれてしまうのである。その時の彼女にはそれがこの世での天上の喜びと思えてしまう。

そのような愛があったにもかかわらず、2人は引き裂かれてしまう⁸⁾。彼女が修道女になる誓いをした時、彼女は彼をまだ諦めきれてはいなかった。

As with cold lips I kiss'd the sacred veil,
 The shrines all trembled, and the lamps grew pale :
 Heav'n scarce believ'd the conquest it survey'd,
 And Saints with wonder heard the vows I made.
 Yet then, to those dread altars as I drew,
 Not on the Cross my eyes were fix'd, but you ;
 Not grace, or zeal, love only was my call,
 And if I lose thy love, I lose my all.

(*ElAb*, 111-8)

神も聖者達も彼女の誓いを半信半疑で聞いていただけであり、彼女自身その誓いに全身全霊をかけていたわけではなかった。彼女の両眼は十字架の上ではなく彼にじっと注がれていたし、彼女の要求は神の恩寵ではなく、ただ彼の愛だけであった。彼女には彼の愛がすべてだったのである。

彼のことを思う彼女は、自分の欲望に浸り、彼との愛を夢にまで見たいと思う。彼女の感情は高ぶり、彼の胸、眼、唇のことを彼女は思い、切なく恋焦がれる。この感情の高ぶりに対してすぐに反省が起り、彼女は理性を取り戻すのである。

Ah no! instruct me other joys to prize,
 With other beauties charm my partial eyes,
 Full in my view set all the bright abode,
 And make my soul quit *Abelard* for God.

(*ElAb*, 125-8)

神と *Abelard* の狭間に揺れ動く彼女の心は、彼との愛を求めながらも修道女としての自責の念に絶えず苦しめられている。

作品の流れを追ってみると、彼女の感情と理性は交互にやってくる。これは主題にいう神の恩寵と人間の本性、節操と愛の激情の流れと一致するものである。それでは、その流れを作品の最初から追ってみたい。

女子修道院にいる彼女の手元に、彼が以前に書いた手紙が届く⁹⁾。これにより彼女の心の奥に秘められた愛の感情が呼び覚まされ火がつくのである。彼のことを思う彼女は知らず知らずに彼の名前を書いてしまう。彼の手紙を読む彼女の心に、以前の彼との愛が呼び戻され、彼女は涙ながらに手紙を読む。ここでは彼女の感情面が理性的なものより勝っている。彼女は名声・富・名誉よりも、彼との愛を得ることを望んでいる。彼との愛が希望通りに実現し彼の妻になれるのなら、他の一切のものはいらないと彼女は考えている。修道院にいる彼女の心の半分は絶えず彼が占めているのである。

彼と出会った時の思い出が甘く彼女の心に去来し、お互いの魂が引き合う幸せな状態だった時のことを彼女は思い出す。そして、修道女になる誓いをした時のことを回想する。愛の感情に浸る彼女の心に反省が起こり始め、神のために彼を諦めようと思うのである。

彼女はこの女子修道院から逃げ出すわけにはいかない。永遠にここに留まらなければならない。それがかえって彼女の心を苦しめ、彼への思いに身を焦がさすのである。彼女は死を思う。そして死のみがこの不変の鎖を解き放つものであることを知るようになる。彼女は彼と交わるのが罪でなくなるまでこの修道院に留まる決心をする。

Assist me heav'n! but whence arose that pray'r?

Sprung it from piety, or from despair?

(*ElAb*, 179-80)

神に助けを求めている彼女には、少し理性的な面が感じられるようになってきてはいるが、その祈りが敬神から起こったのか絶望から起こったのかという問いを彼女が発しているこの時点では、まだ欲望が理性に勝っているようである。愛に揺れ動く女性の心情としては当然経験すべき心の動きである。

神に助けを求めながらも、彼女は彼との愛の進展を望んでいる。過去の自分の罪を後悔しながらも、その思いに熱くなり、彼との新たな交わりを夢見ている。そんな自分の思いを否定しながらも愛しい人が忘れられない彼女の苦悩は、理性的には分かっているながらも感情面で抑制できない彼女の葛藤が描かれているのである。

彼女は愛に苦しみ、絶望し、後悔し、またそれを望み、包み隠し、愛の苦悩に溺れている。愛の感情が高まると神を思い出し反省する。

Oh come! oh teach me nature to subdue,

Renounce my love, my life, my self—and you.

Fill my fond heart with God alone, for he
Alone can rival, can succeed to thee.

(*ElAb*, 203-6)

神を思い出すたびに、彼女は理性を取り戻し、修道女という自分の立場を自覚する。

彼女は清廉潔白な Vestal の運命のことを思う。神の僕となり、一生を神に仕え、祝福されている Vestal のことを考える。だがそのすぐ後に別の夢を見る。ここでは肉体的、官能的なものまで暗示さすような描写が続いている。悪魔がすべての抑制を取り除き、彼女の愛を燃え上がらせてしまうのである。彼女の良心は眠り、本性が頭を持ち上げ、彼女の魂は自由気儘に彼へと動き出す。愛の歓喜に酔いしれる彼女には彼との抱擁さえ夢に望むようになってしまうのである。

その夢から目覚めると愛の幻想は消えてしまう。彼女はもう一度夢を見たいと思い眼を閉じる。しかし、心の抑制が働いているためか、もう同じ夢は見ることが出来ない。彼が空から手招きをするが、雲が2人の間を遮ぎり、波が逆巻き、風が起こってしまう。彼女は悲嘆にくれ、目を覚ます。彼女は切ない思いに身悶えている。

彼女の狂おしいほどの恋慕の情に比べると、彼は燃え上がっていないと彼女は感じる。

Come *Abelard*! for what hast thou to dread?
The torch of *Venus* burns not for the dead;
Nature stands check'd; Religion disapproves;
Ev'n thou art cold—yet *Eloisa* loves.
Ah hopeless, lasting flames! like those that burn
To light the dead, and warm th' unfruitful urn.

(*ElAb*, 257-62)

彼女は愛の感情に激しくもて遊ばれ、他のことを顧みる余裕がない。

彼女の目前に彼の姿が現れるようになる。木立ちの中に、祭壇の前に彼の姿が現れる。ここで彼女の愛の感情は頂点に達している。修道院のお勤めの間にも彼のことを思うようになり、賛美歌の中に彼の声を聞くようになる彼女には理性は微塵も感じられない。情火の海の中で彼女の魂は弱れている。その間、祭壇は炎を上げ、天使は震え回っているのである。

その後、心が静まり、謙虚な気持ちになると神の恩寵が現れ出すのである。彼女が屈辱を受けて、神に祈り、震えている時、神は救いの手を差し延べてくれるのである。だが、それに反抗するかのようになり、彼女は神の手から自分を無理にでも引き離してくれるように頼む。悪魔達に手を貸しても、自分を奪ってくれるように頼むのである。

しかし、それも長くは続かない。彼女の理性が頭をもたげ始めているのである。現在の彼のことを思い、自分の欲望に彼が乱されて欲しくないと考える。そして、自分のことを諦めてくれることを願うのである。

彼を諦めようとする彼女の心は落ち着いてくるようになる。燃えるような感情が消えてくる。しかし、彼女の心の中にある彼への思いが全く無に帰すというわけではない。その炎が静まり、燃え上がるものがなくなるということである。これは次に出てくる精霊の言葉の中に暗示されている。

Once like thy self, I trembled, wept, and pray'd,
Love's victim then, tho' now a sainted maid :
But all is calm in this eternal sleep ;
Here grief forgets to groan, and love to weep,
Ev'n superstition loses ev'ry fear :
For God, not man, absolves our frailties here.

(*Eloisa*, 311-6)

以前は愛の犠牲者だったこの精霊は天上界の素晴らしさを説くにあたり、そこでは苦悩は煩悶することを忘れ、愛は涙を流すことを忘れると言っている。決して苦悩や愛がなくなってしまうとは言っていないのである。それらが無に帰すのではなく、自己を悩ます感情の高ぶりがなくなり、平穏が保たれると言っているのである。彼女はこの精霊の言葉の後、天上界のことを思い、そこに行きたいと切望するようになる。

ここでの彼女は、感情面より理性的な面が強くなっている。そして、自分のことだけを考える以前の彼女とは明らかに違ってきているのである。しかし、彼のことを忘れたわけではない。この愛の感情がまったくの無にならないということは、彼女の最期の希望を考えても分かるのである。彼女は彼と同じ墓に入りたいと望んでいる。その時の彼女には燃焼する欲望はもはやない。理性が彼女の欲望を制御するようになっているのである。

臨終の時に、一時ではあるが、彼女は飛び行く自分の魂を彼に捕えてもらいたいと思う。しかし、その欲望のままには彼女は死に至らない。すぐにそれを打ち消す。死ぬ時も希望があるとは、*An Essay on Man* にも述べていることであるが、彼女の最期の希望は、彼に見守られ、幸せに天上界に行くこと、そして彼と同じ墓に入ることである。その彼女の希望は、何がなんでもそうしたいという強いものではない。自分の希望が実現されるように神に祈っているのである¹⁰⁾。

Eloisa の理性と感情は交互にやって来る。感情、この場合は愛の激情が彼女を支配しそうになると理性が現れ、理性が頭をもたげようとするとき愛の感情が燃え上がる。その交互する2つのものの強弱は、始め感情が強かったけれども、作品が進むにつれて、徐々に理性が強くなって来る。最終的に彼女の愛情は、燃える狂おしい愛情ではなくなり、落ち着きを取り戻す。理性的な考えが彼女を大きく占めるようになるのである¹¹⁾。

III

幸福とは何であろうか。 *An Essay on Man* によれば幸福とは我々の存在の究極の目的である。

Oh Happiness! our being's end and aim!
 Good, Pleasure, Ease, Content! whate'er thy name:
 That something still which prompts th' eternal sigh,
 For which we bear to live, or dare to die...

(*EOM*, IV 1-4)

我々人間が生きる糧となるものが幸福である。そして、真の幸福というものは一個人の利益の中に存在するものではなく、全体の利益の中に存在するものである¹²⁾。

その幸福を Pope は美徳と結び付けている。

Wise is her present; she connects in this
 His greatest Virtue with his greatest Bliss,
 At once his own bright prospect to be blest,
 And strongest motive to assist the rest.
 Self-love thus push'd to social, to divine,
 Gives thee to make thy neighbour's blessing thine.

(*EOM*, IV 349-54)

自然はその贈り物の中で、人間の最高の美徳を最大の至福と結び付けている。そして、祝福されるには、他人を助けようという気持がないと駄目なのである。一個人の欲望のみを満足させたいというところに真の幸福はないのである。自愛は社会的なものまで、神のものまで押し上げられて初めて隣人の祝福を自分

のものとする事が出来るのである。それが美徳になる。そして「美徳のみが地上の幸福である」¹³⁾としている。

至福に関しての記述をみると、次の言葉が密接に関係してくる。

The bliss of Man (could Pride that blessing find)
Is not to act or think beyond mankind ;
No pow'rs of body or of soul to share,
But what his nature and his state can bear.

(*EOM*, I 189-92)

つまり、人間の域を越える行動や思考をしないことが大切であるということである。人間がその分を守ることが、至福を手に入れる道なのであり、神が与えた人間としての分を越えてはならないということである。

幸福と不幸に言及した箇所もある。

Fortune her gifts may variously dispose,
And these be happy call'd, unhappy those ;
But Heav'n's just balance equal will appear,
While those are plac'd in Hope, and these in Fear :
Not present good or ill, the joy or curse,
But future views of better, or of worse.

(*EOM*, IV 67-72)

ここで幸不幸は現在という物差しでは測れないとしている。未来という物差し、つまり将来において「良くなる」か「悪くなる」かという見込みが大切だとしている。この時間的観念は、理性と自愛にも通じるものである。前出したように、理性は未来、自愛は現在、とそれぞれ結び付いている。目前の幸せを真の幸福ということは出来ない。将来のことは分からないにしても、それを現在の

希望とすることが人間には出来るのである。このことが神の意志であるとしている。人間はいつになっても希望が湧いてくる。現在の自分の状態に完全な満足を抱いている人間はいない。常に未来に対し幸福を期待しているものなのである。

この将来に幸福を期待するという観点から Eloisa を見てみよう。

Eloisa が Abelard と相思相愛だった時のことを、彼女は自分が幸福の絶頂にいる時だったと思っている。しかし、この幸福は真の幸福とは言えないものであった。彼との別れがきた。その後の彼女は彼との愛を忘れようとしながらも忘れられない苦悩の日々を送っている。

その感情は理性との揺れ動きの中で次第に平静を取り戻していき、将来的な展望を彼女は見い出すのである。最終的に死を考えるようになるが、死を待つ、それも落ち着いて待つようになる。キリスト教で禁止している自殺という手段ではなく¹⁴⁾、神に認められた生涯を過そうとするのである。

死についての描写を *An Essay on Man* から捜すと次のようなものがある。

To each unthinking being, Heav'n a friend,
 Gives not the useless knowledge of its end :
 To Man imparts it; but with such a view
 As, while he dreads it, makes him hope it too :
 The hour conceal'd, and so remote the fear,
 Death still draws nearer, never seeming near.
 Great standing miracle ! that Heav'n assign'd
 Its only thinking thing this turn of mind.

(*EOM*, III 71-8)

物を考える人間にのみ、天は死の概念を与えたのであり、死は近いと思えないながらも常に近付きつつある。人間は死を恐れながらも、それを望むような思考をするのである。彼女もまた死を望むようになってくる。

女子修道院にいる彼女は、悩める自己を救う方法として、そして彼との愛の結末として、修道院生活を全うし、死を待つという結論に達する。彼女は死のみが自分を救う唯一の道であり、死が一番良い解決方法であると知るのである¹⁶⁾。死のことをまだ考えなかった時の彼女は、感情に溺れ自分のことしか考える余裕がなかった。自己の欲望を前面に出し、他のものは一切眼中になかった。それが少し見えるようになってくるのである。彼の立場を考えることが出来るようになる。そして手を差し延べてくれている神が彼女の敵ではなく、自分を現在の境遇から救ってくれる唯一の存在と思えてくるのである。彼女は神に救いを求めるようになる。

Pope は「この世にあるものはすべて正しい」¹⁶⁾、自然はそれ自体完全な秩序を保っているとしている。

See! the sole bliss Heav'n could on all bestow ;
Which who but feels can taste, but thinks can know....
(*EOM*, IV 327-8)

神の祝福はただ感じさえすれば味わうことが出来、考えさえすれば知ることが出来るものなのである。

彼女は徐々にではあるが、神を感じ、神を考えるようになるのである。そして、彼女の愛の激情がその極致というところまで行った時、平静さを取り戻す。自己の現在の状態を考え、他のことを考えることが出来るようになる。そして未来の希望を抱くのである。神に許され、彼と同じ墓に入りたいということが彼女の最期の希望であり、それを彼女は現在の希望としているのである。

IV

“Eloisa to Abelard”における Eloisa の愛はこの世においては悲恋のままで終わっている。彼女の感情は、ほしいままに翼を与えられ天翔るところまでには行っていないが、作品の中で彼女の心情の表現が主観的に描写され

ており、心情の吐露が読者の感情を揺り動かすように描かれている。

抑え切れない感情の燃え上がりは理性と交互に現れ、結末へと向かうにつれ、落ち着いてくるようになる。そしてその燃え上がっていた愛情の火は衰えてしまう。理性が感情に勝っているのである。彼女は死を考え、将来に希望を持ち、修道女として一生を終えるという考えになってくる。この結末は、修道女として美德とされている生き方に彼女を立ち戻らせている。自己の欲望のみを考えていた彼女はもうそこにはいない。他のことをも考慮しつつ、神に身を委ねようとしているのである。彼女の最期の希望は、他を押し退けても押し通すというような強いものとして描かれてはいない。これは至福を手に入れる条件を満たしていると言えるのではないだろうか。

理性が彼女を支配する。その結果として彼女は Abelard の立場も考慮するようになる。神の恩寵を感じ、神の国に行きたいと望むようになる。愛の感情が落ち着きを取り戻している彼女、そして将来に希望を持っている彼女には、*An Essay on Man* でいう “Happiness” が備わっているのである。

註

- 1) Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope*, ed. John Butt (London: Methuen & Co. Ltd., 1968), 以下この小論で引用する Pope の作品はすべてこの版による。詩の引用行数の前にある EOM は *An Essay on Man* を、EIAb は “Eloisa to Abelard” を略した記号である。
- 2) *OED* の “Passion” の項目 6 を参照。
- 3) *EOM*, II 97-100.
- 4) *Ibid.*, II 273-4.
- 5) *Ibid.*, II 71-4.
- 6) *EIAb*, “The Argument” を参照。
- 7) *EIAb*, 68.
- 8) 2人が別れた理由に関しては作品中に詳しく記していない。これは当時の読者には分かりきったことだったからだと思う。Eloisa と Abelard についての詳細は Geoffrey Tillotson 編集の *The Poems of Alexander Pope* (London: Methuen & Co. Ltd., 1972), II の “Appendix I” (p. 411) を参照。
- 9) この手紙は、Abelard が手紙を書いたすぐ後に Eloisa の手元に届いたということではない。Eloisa と Abelard は実在の人物で、Eloisa は1163年、Abelard は

1142年は亡くなっている。

- 10) *ELAb*, 343-4.
- 11) 拙論「Eloisa と神の恩寵」(*EBARA REVIEW* 第2号)を参照。
- 12) *EOM*, IV 37-8.
- 13) *Ibid.*, IV 395-8.
- 14) “Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady”における女主人公と根本的に違う点である。
- 15) 死がはたして解決になっているかどうかについては Donald B. Clark は *Alexander Pope* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1967) の67ページで解決策としており, Rebecca Price Parkin は *The Workmanship of Alexander Pope* (New York: Octagon Books, 1974) の73ページで解決ではないとしている。彼女の最期の希望を考えれば, Abelard への思いはまったく無に帰していないため, 解決ではなく単に終わらせているだけと言えるだろうが, Passion を愛の激情と考えれば, やはり彼女にとって死が最良の解決策と言えるだろう。
- 16) *EOM*, I 294, IV 145.

(この小論は平成元年3月18日「現代英米文化学会」において発表したものの一部をまとめ, それに加筆したものである)